

2020 読書メモ 9月号

やなぎさわかつひろ

柳沢克央（信州・上田仮説サークル）

2020年9月26日（土），9月例会用レポート

○今月までに読んだ本（順不同）

◆アンヌ・モレリ著/永田千奈訳『戦争プロパガンダ 10の法則』（草思社文庫・2015年）

◇「あとがき」を要約。2001年，アメリカ同時多発テロの後，もっとも大きな変化はインターネットの普及だった。それまでは，政府の公式見解，いわば「大本営発表」が大手新聞社，テレビ局によって伝えられ，「プロパガンダ」の中心を担ってきた。だが，インターネットの普及によって，私たちはさらに多様な情報に触れることができるようになった。「タテマエ」の裏にある「ホンネ」を知ることにもできるようになった。市民はついにプロパガンダに対抗する手段を手に入れたのである。

だが，その一方，こうした情報は匿名性が高く，内容的にも玉石混交であり，デマに振り回される危険も拡大した。当然のことながら，インターネットを利用した「プロパガンダ」もまた誕生する。本書に挙げた「10の法則」は，ネットの世界にはびこる誹謗中傷や誘導，洗脳の手口にも当てはまるものなのである。

インターネットという新しい道具の誕生は，情報戦略を大きく変え，多様化，複雑化した。しかし，そこで使われる論法，心理的な戦術，プロパガンダの手法は，驚くほど変化していない。なにしろ，これらの心理戦は，新聞，ラジオ，映画，テレビと媒体が進化したところで，第一次世界大戦の時から（一部はそれ以前からも）繰り返されてきたものなのだ。

戦争プロパガンダは「戦時中」だけではなく「開戦前」から始まっているのだ。その意味で，私たちもまた戦争プロパガンダとは無縁だとは言い切れない。

実際，たとえ戦争でなくても，ふたつの陣営が対立するとき，手さぐりで話し合いや交渉を模索する人々をあざ笑うかのように，対立をあおるような言説が必ずと言っていいほど出てくる。基地問題や原発の是非，国内の政治の場で

も、いやもっと身近な争いでも、私たちは既にそんなケースをいくつも見てきているはずだ。

いつの時代もひとは、憎悪をかき立てられ、正義に奮い立ち、弱者に同情する。それはいかにも「人間らしい」感情の動きであり、文化を支える情熱ともなる。プロパガンダにまったく心を動かされない人間がいるとすれば、よほどの冷血漢か、利己主義者だろう。感情を責めるつもりはない。だが、人間らしい心を失うことなく、そこに流されない。そんな姿勢が必要なのだ。

『熱い心と、冷たい頭とを持って』と言ったのは、イギリスの経済学者、アルフレッド・マーシャルだが、情報の海でおぼれそうになったとき、感情に流されそうになったとき、本書がふと足を止め、考えるためのヒントになれば、訳者としても嬉しい限りである。

◆今月の「つぶやき」

文部科学省は最初から大学入試改革など成功させようと思っていない。

捨て身で統一筆記試験から総合型選抜（旧称 AO 入試）への移行を図っていると見るべきだ。教育制度の米国型への移行を目論む勢力がいまも着々と9月入学などの米国的教育政策実施への準備を進めているはずだ。

メディア・リテラシー能力の差が、選抜方法の選択の差となる。これがいわゆる「格差社会」への移行の具体例なのだ。じっさい、ここ数年、ベネッセ模試の受験者数は誰の目にも明らかな勢いで減少傾向を続けている。単一の尺度による筆記試験での競争の比重はこれからますます減少していくことであろう。文科省は数々の愚策を打ち出してきたが、「探究型の人材育成の方針」だけはみごとに正鵠を射ていたと銘記しよう。

一部の不見識な政治家が制度設計など全く眼中に入れずに「高大接続改革」という理想論を振りかざした。視野の狭い文科官僚は政治家に忖度をし、共通テスト記述式導入、英語民間試験導入をあくまで机上の空論として仕立てた。これにより、政治家の機嫌を取ることに成功し、一部教育産業との癒着構造を深めた。しかし、具体的に運営することなどできないと端から分かる空論であるから、柴山大臣は具体的な成果を残すことなく退任。萩生田文科大臣の時代となり、無残な謝罪をすることになった。共通テストは竜頭蛇尾そのものの痴態でなくて何なのだろうか。さらに「主体的、対話的で深い学び」とのスローガンからの乖離（かいり）がはなはだしいため、現場教員からも呆れられる始末だ。

センスの良い受験生とその保護者は都会の有名私立大付属高校等への入学に

より、効率的な自己実現の道を開拓する。萩生田大臣は自身の立場を知ってか知らずか「私学は文科省にとらわれずに自由な教育活動をしてほしい」と自身の存在意義を真っ向から否定する妙な注文をつける。これにより国公立大学・地方公立高校の地盤沈下の流れが確定したと私は見る。繰り返すが、文科大臣が公然と旗艦的な国公立大学のみを優遇し、地方国公立大学の斬り捨ての方向を打ち出したのだ。いまのところ地方国公立大学からの声は聞こえてこないが、本当にこんなことで良いのだろうか。

戦後の護送船団方式を支えた均一な人材育成の方針は賞味期限切れを迎えた。「戦艦大和」轟沈である。新首相は「自助・共助・公助」なるスローガンを打ち出している。これは「国はもう国民の人生に責任を持ってませんよ」という宣言だと見るべきであろう。「サヴァイヴァルの時代」が始まっている。「自分の命は自分で守る」、「天は自らを助けるものを助ける」(サムエル・スマイルズ)

【いまそこにある「大本营」洗脳】(知らぬ間に気づいてみれば「負け戦」戦艦大和ズブズブ沈む)

◆A 君はなぜ、××帝国の必勝を疑ってばかりで、○○ムラ総ぐるみで取り組んでいる金属類の供出に協力しないのか。

◆B 君はなぜ革新勢力の正統性を疑うばかりで、意識が高く民主的な学生の輪に加わらず、デモに参加しようとししないのか。

◆C 君はなぜ*****授業研究会に政治的な話題を持ち込むのか。

◆D 君はなぜ△△首相の悪口ばかり書き散らし、△△首相の下で世の中が良くなった部分を認めようとししないのか(本人の意思など確認せずに、一方的に言い寄ってくる)。

◆E 君はなぜ教会の権威に歯向かって、「地球が太陽の周りをまわっている」などとばかげた危険思想を信じ、広めようとするのか。

◆F 君は頭がおかしい。どうかしているのだ。こんなにみごとにインフレからXX国経済が立ち直って景気が良くなって、経済が発展して、立派な高速道路までできたというのに、相変わらず「□□□総統はデマ宣伝をして、国民をペテンにかける詐欺師だ」と誇大妄想みたいなことを言っている。理性があるのか。

◆G 君はなぜ「コロナはデマだ。X氏はフェイク首相だ。文科相は★★だ。県教委も★★だ」などろくでもないことを言っているのか。

◆H 君はなぜ社会が一丸となってマスクをし、手洗いを徹底することに努めているのに、一向に実践しようとししないのか。

[2020年9月26日(土)昼, 記す]